ラウダーテ・デウム
ー気候危機についてー

篠田克巳

使徒的勧告「ラウダーテ・デウム」は 2023 年 10 月 4 日に公布され、2023 年 12 月 12 日に邦訳が出版された教皇フランシスコの使徒的勧告で、8 年前に出された回勅「ラウダート・シ」の続編ともいわれる、教皇が発し続ける気候危機に関する訴えです。
（以下の『　　』内は本文からの抜粋です）

第１章では

『極度の異常気象、頻繁に訪れる異常な暑さ、干ばつ、その他、地球の悲鳴にも似た訴えを、近年私たちが目の当たりにしているという事実を無視出来る人はいません。』と気候変動への対応が遅々として進んでいないことを指摘し『その原因は人間ーつまり「人為的」ーであることは疑いようがありません。』と続けられます。

第２章ではさらに踏み込んで

『技術主義パラダイムは人間の力を増大させる考えで、人間以外の実存は好き勝手にしてよいただの原料に過ぎないとするものです。存在する一切のものは、感謝の念を抱くべき、いとおしむべき贈り物ではなくなり、奴隷とされ、人間の頭脳と能力の気まぐれの餌食にされるのです。・・・少数の人がそうした権力を握ることになれば極めて危険です。』

『こうした技術主義パラダイムに抗して、私は明言します。私たちの力はここ数十年の内に猛烈な勢いで増大し強烈で圧巻の技術進歩を遂げてきたものの、同時に、多くの生き物の生命と私たち自身の生存を脅かしうる非常に危険な存在になってしまったことに気づいてはいません。今こそ、この事実を認めるのが遅きに失する事の無いように、明晰さと正直さが求められます。』と注意を促します。

第３章から第５章では国際政治について言及し

『堅実で永続的な前進のためには「多国間協定を優先すべき」』としながらも、『多国間主義を過剰な権力を有した個人ないしはエリート集団に権限を集中させた世界のこととはき違えてはどうにもなりません。私たちは何よりも「世界規模の共通善、飢餓と貧困の根絶、基本的人権の確実な擁護、これらを保証するための権限を付与された実行力のある世界機構」のことを話しているのです。』と指摘され、

『現在の課題は、旧来の多国間主義を・・・再設計することや再創造することにあるように思われます。』と言われます。また、気候変動の問題に取り組むために１９０か国以上の代表が毎年開いている締約国会議（ＣＯＰ）についいても触れ、京都で開催されたＣＯＰ３(1997 年）パリで行われたＣＯＰ２１(2015 年)のように意義深い機会であったことを認めながらも、『設定目標が達成されなかった失敗を思うと不履行時の制裁に適した仕組みが欠如していたため、不十分にしか実施されませんでした。』とも指摘されます。